呪いの森と、魔女の国

織田裕一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
呪いの森と、魔女の国

【Ｎコード】
Ｎ３４５９Ｔ

【作者名】
織田裕一郎

【あらすじ】
前作品で、書ききれない部分を分割で掲載。この作品は、夏のコンテスト用に書いてた作品です。他の作品を出すことにしたので、少しでも人の目に触れたく、掲載しました。

もう一つの神話。

プローローグ

諸外国の王達は、
エルガイアの挙兵に、眉をひそめた。

アルフェリアと、同盟国である。セウリアは、アルフェリアのため。
一万の兵を集め、エルガイア北の国境に、出兵した、

セウリアは、塩の交易で、財をなした国。シュレットの兄、ハスフェルが、ある事が、
きっかけで、セウリアの相談役を、兼任していた……。

――数年前、

セウリアは、沿岸部の半島と言う、小国に過ぎない国だった、

一年中温かく、気温が安定していたから。大小複数の島を有する。
リゾート地として有名である。

が、これと言う、名産品、交易品がなく。
旅人の落とす。
外貨が、主な収入であった、
それが激減したのが……、
エローラの大使、バルタスの暗躍である。
自国の王を、暗殺した、ついに自ら王と、なるべく、クーデターを
起こして、エローラの王になる。

数年とせず。ルガイヤと、戦端を広げ、これを、攻め落としたのだ。
――このまま……。
戦争の噂で、旅人が激減した……。
数年とせず。セウリアは、財政難に陥る。

若き王は、苦悩した、幕僚の1人が、進言した、
――領内の島に。アルパーナの皇子が、隠居してると……。
面識のあった、王は、ハルフェル皇子に、会いに行った……、

アルパーナの三人の皇子は、有名で――、
第二皇子のハルフェル殿下は、賢者と、知られていた、
ただ……、
二人の兄弟と違い、賢者のメダリオンの持ち主だと、言われてるだけで、
理由を、知る者は、少ない……。

一部の知識人、魔導師、神学者が、膨大な知識を有する。
ハルフェルを、訪ねるくらいで。
二人の兄弟ほど、あまり表に出ない。人物であった。

ハルフェルの知識は、幅広く。
諸外国の歴史、地図、過去の経済、交易品の製造法まで、幅広く。
だからこそ、それだけで、
――魔導師でもないハルフェルが、
『魔導師の塔』からメダリオンを、与えられるのは、異例である。
若き王と重鎮が、
島にある。屋敷に来て、

「なるほど……」
ニッコリ微笑すると、嬉しそうに頷いた、
――ハルフェルは、
賢人にある。知識を得ることを喜びに、教える喜びを、糧にする。
人物だ、即答した、
「これだけある。砂浜は、宝の山だよ」

嬉しそうに、知識の１つを、ヒモ説いた。
話を訊いた、セウリアの政務官、同席した、外務官は、己に無い知識だけに。半信半疑だが……、

迷ったが、王は、ハルフェルを知っていた、王は、シュレットの友だ、面識がるばかりか、逸話も集めさせていたのだ、だから決意して、幕僚を、説き伏せた、

そしてついに……。
幕僚を説き伏せ、
ハルフェルの書いた、製造法に従い。塩田事業を、始めたのだ。

すると――――。

大陸では、塩の製造する。国が少なく。
作れる量も、僅かであり、そのため高価だった……。

ハルフェルは、これを逆手にとった交易を行わせた、
一年中変わらぬ気候のセウリアには、広い砂浜がある。
人もいた、だから塩を大量に作り。塩を安価に、したのだ、

安い塩に、庶民は飛び付いた、次第に――有名になり、
着実に利益を上げた、

ハルフェルは、膨大な、利益を得るためと、若き王に、商会の建設を進言して、これを快諾。

――セウリアは数年で交易大国となった。

ハルフェル皇子の助けで、アルパーナと、同盟国となった。

は、その後になる。

エルマの王は、友。ハロルドのために、立ち上がる。自ら指揮を取るべく、――厳命、

一万の騎兵を編成して、エルガイア国境に、進軍した、

エルマは、歴史の古い国で、頑迷な国王の元、自国の学校を作り、広く門戸を、開いた。ディシス王、モータル王は共に、騎士学校の卒業生である。

エルマは、騎士の国と名を馳せている。

秩序を、重んじ。騎士団は、礼節に厳しく、労りの心を、大切にする。古き国だ、

騎士学校では、四年の期間に、礼儀作法、一般教養、剣、槍、馬術で、身体を鍛える。

卒業した生徒は、騎士として優秀でありと、宣伝してるような物で、一種のブランドになっていた。

そうすると、金を積んでも、子供の入学を望む。貴族は多く、

……一方で、
厳しい戒律に、辞める。生徒も多い。
だけど騎士学校では、毎年試験が行われ。貧民でも合格すれば、無料で、入学出来る制度があり。毎年試験を、受ける者は、後を断たない……。

皇太子ハロルドは、
父の意向に従い―。
騎士学校に入学した。
――その年から、二年、剣技大会で、優勝した、
さらに……、
翌年から行われた。
馬術大会で、三位と優秀な成績を残している。

現王ジゼ・ライザ・エルマとは、騎士学校からの親友である。

エルガイア挙兵に、憤る。臣下達を、一瞥して、将兵を自身で、指揮すべく、準備する。
セウリア、エルマ二国の王は、互いに手を結び。
エルガイア北方、
国境に、陣営を築いた。
――――そして。

エルガイア、全土を被う。闇に――、

二国の将兵は、恐怖に震えた。
『諸外国の皆さん♪、始めまして、私は『呪いの森の魔女』と呼ばれる。アイレット・コール・レイン、私の国魔導王国ルアロに、戦

争仕掛けに、来たんじゃないなら、帰りなさい？』
頭に直接、声が、響いた、
『そうそう～、一応伝えるけど、魔導王国ルアロは、アルフェリアと同盟関係だから、詳しく知りたかったら～（笑）、使者寄越して。ご苦労様♪』
唐突に、闇は消え去り。声は消えた……。
残された、二国の将兵は、呆然と立ち尽くした。
訳も分からないが、至急調べなくてはならない。二国の兵は、自国に戻ることにした……。

第６の魔女の国の章

――風竜（エローラ）の咆哮は、『竜の風』（ソッニックブーム）の魔法を放つ、
騎兵は、一瞬で瓦解した、落馬した騎士を残して、
馬が恐怖で、逃げ惑う。
さらに竜は、
天空に昇り、一気に下降して、地表ギリギリを抜けた。
それにより大規模な、『竜の刃』（ドラグスラッシュ）で、歩兵。
数千を無力化した。
竜から離れていた、ハーピィ部隊は、
逃げ惑う将兵を、捕まえ、次々と連れ去り、魔方陣の中に消えた……。

エルガイア軍の弓兵は、それでも応戦した、だが、ハーピィ魔導兵の『風刃』（エアーカッター）で、壊滅させてく。

――――友よ。
王は、疲れていた……、空を力一杯、
駈ける。喜びに震えた。
アンダーグラウンドと違い、魔力の密度が薄く。竜の魔法は、
魔力の消費が、激しい。
「エローラ、休め」

――――承知。

風竜を、送還する直前、竜の背から、飛び降りる。
素早く『浮遊』の魔法を使い、落下スピードを、制御しながら。

――――我が、友にして。疾駆する者よ。

愛馬ファルスを、召喚した、
竜が、消えた瞬間、エルガイア兵は、歓喜して、
「竜が消えたぞ、今だ！、殺せ」
数百の歩兵は、シュレットに、緊迫した。
「シュレット様を、守れ！」
巨馬ファルスを、守るべく、ア・フェリア師団兵が、集まり、
防御の陣形を整えた。ハロルドの考えではあるまい、アロワナか、
「すまない……」
アルパーナの兵か、見知る者がいた。真摯な眼差しが、心に刺さる。
皆小さく頷き
「皆、頼むぞ」『はっ！』

――――上空に留まり。ハーピィ姉妹は、小さく笑う。

「予定通りね。姉さん」
「そうね♪、男達は？」
「十分、里に運んだわ？」
「そう、シュレット様と、味方の将兵の援護に、向かいます」
「はい、姉さん」
甲高い声で。ハーピィ達に、合図した。

するとハーピィの小隊は、撹乱に奔走した。

「クッ！、何をしておるか、たかが少数ではないか！」

「しかし、王よ……」言い募る幕僚を、激昂して、首を跳ねた。

「我が前に、あの男の首を持ってまいれ！」

――最早……これまでか、誰もが理解した、

王は……。狂気に、犯されたと……。

幾ら、数で勝ろうと、エルガイア軍は、少しずつ、崩壊しはじめていた、

――一方で、

「シュレット様を、守るのだ！」
僅か数十の兵まで。数を、減らしていた、

――このままでは…。
悲痛な表情が、見て取れた。
……ここまでだな。同盟国の兵として、十分だ。

「皆、前を、開けてくれ」
「しっ、しかし……」
言い募る。兵士に、

――シュレットの目が……、
冷酷な光を、宿した。「死ぬつもりはない」鋭い眼光、殺気が、
目に見えるほど、
不敵に笑う、シュレットに、
「はっ！」
慌てて、引き下がる。
迫る。エルガイア兵を睨み付け、

『エルガイア将兵に告げる。負けを認め、何処と無く去れ。命だけは、助けてやる』
『魔声』の魔法が、
エルガイア将兵に、届く。なぜか……、
取り囲む将兵は、殺気立ていた。
「どこを見て、言える！」
「殺せ！、領土を得るのは俺だ」

数で勝る。エルガイア軍、孤立した、シュレット皇子の構図。
だが――、
いつの間に、ハーピィが達は、
シュレットから離れたのに、誰も気付かない。

わざわざエルガイア兵を、集め、挑発したと、最後まで、気付くことはなかった……。

殺気が、膨れ上がる。王と同じく、欲望に目を、眩ませ。
エルガイア兵が、シュレットに殺到した、

ア・フェリア師団の兵が、動こうとした瞬間、凄まじい、殺気を込めた、眼光に……、
たたらを踏んで、止まる。青ざめる兵達を、小さく笑い。

「黙って見てな、同盟国の兵士共」
兵士達は、息を飲んだ。
それを小さく苦笑しながら、
シュレットは、魔力を解放した、

ゴオオオォー

魔力による。突風が、凄まじい、勢いで、エルガイア兵を押し包み、
足を止める……。
「さあ、喰らえよ」
獰猛な笑みが、口元に張り付いた、

――我が、声にこたえよ。
『腐敗の魔王』（ゾアルイータ）よ……。

――生を、喰らい。『死者の国の扉へ』（ヘブンザゲート）誘わん。

――『開け』。

ゾグン。
腕を、振るい。
力ある言葉に。
太陽が、闇に――喰われた……。

――光は闇に。生は死を。
禍々しい。言葉は、呪いとなり……。
命ある者は、立ち尽くした。

「なっなんだこれは……」
吐く息は白く。辺りに異臭が、立ち込めた。
――我が、前に立つ、愚かさを、悔いるがよい。

……命を餌に、『死者の国の扉』が口を開けた。
……それは、命ある者が、抱く嫌悪。
「なっ、なんだあれは…」
バルタスは、あまりの光景に、色を無くした。
「ばっ、化け物…」
ザグン、
叫ぼうとした、兵は消えた。
「ひっ……」ザグン、
また、兵は消えた……、
恐怖に震える。命ある者は、
「なっ、なんなんだ！」
突然消える。同僚に、恐慌をきたし、逃げようとした、
だが……次々と、消える。
ザグン、ザグン、ザグン、ザグン、ザグン、ザグン、ザグン、ザグン、ザグン、ザグン、ザグン、ザグン、
黒き太陽から、闇の雫石が、堕ちる。堕ちて、堕ちて、堕ちた。
……逃げる。
兵の上に……、
――消える。
―消える。
まるで……。生きたまま、喰われてるように。

「なんだ……。これは…」

――悪臭に、鼻白む

バルタスの前にいた、幕僚は、雫石が当たり腐敗を、撒き散らせ、消えた。

――ゴポリゴポリ。

バルタスの足元で、
腐汁が泡立ち。
『愚かなり、人間よ。
我が君を、敵にする愚かさを悔いるがよい』
そいつは腐汁から顔を出した。

――ニタリ、

目蓋の無い目、皮膚の無い顔、唇の無い剥き出しの歯から、呪詛が、つむがれた――。

音もなく。バルタスの前に立ち、いきなり顔を掴んだ、
恐慌来した、バルタスは、魔人から。逃れるため、剣を抜いて、
斬る。斬る。斬る。
斬る。斬った。

――魔人は、唇のない口で、
――ニタリ、
笑う、笑う、笑う、わらう。わらった……。
バルタスの目が、見開き、恐怖に、顔が、ひきつる。

―べきぐちゃぐちゃ、
腕が、バルタスの体を貫いた、
魔人は、ゴミを捨てた。
ゴミは、糸の切れた、人形のように、地面に堕ちる。

やがて……。
ゆっくりギクシャク、立ち上がり。死人の王として堕ちる。
「ひぃー……」
失禁する者。正気を失う者、動かなくなる者、堕ちた死人の王は、襲う。喰らう。
殺し……仲間を、
増やした。

エルガイア軍の大半は。死者の軍勢に、成り果てる。

「シュレット様、これは……」
喰われる人々を、正視出来ず。呻く。
「気にするな、お前達は襲われない」
「はっはい……」
魔力のある者なら、『死者の国』の召喚内を、垣間見るのだろう。

この力こそ。アンダーグラウンドで、6体の魔王を倒して、手に入れた、魔法の1つだ。

―――闇は、消えた。
今まで。
見ていた悪夢が、嘘のように、
消えていた……。
『エルガイア将兵に、告げる。武器を捨て。降伏せよ』

生気を失った兵は。力なく従った。

これが――
アルフェリア大戦の結末で、
新たな大戦の序章だった……。

――アルフェリア公歴　元年。
アルフェリア国境での戦争は、
伝説の魔女の介入により、
思わぬ結末に終わる。
諸外国の王達は、動向を探るべく。
魔導王国ルアロに、密偵と、使者を送り、様子を、見ることにした、

――しかし……。

渦中の中心にあった。アルフェリアが、魔導王国ルアロと、同盟を、表明した……。
密偵は、すぐに戻た、報告を受けた、諸外国の王達は、
報告の内容に、半信半疑であった。
今しばらくの……、
静観が必要だと、感じた――。

アルフェリアと同盟国である。セウリアは、カウベル・ジーザを使者として送る。

カウベル・ジーザは、商人ながら、外交官を任じられる程。
目端の効く人物で、
塩の交易を、一手に任される。ジーザ商会の。若き商人である。

エルガイアは、貧困に厳しい生活を、長年強いていた、
カウベルが、見たところ、
飢餓に苦しむ。民の姿はない……。

大通りは、人に溢れ。商店は、活気に溢れて。豊かな国のように、
見える。
……同じ国とは、思えない変わりようだ……。カウベルは、
数日――、宿に泊まり、情報を集めてから、魔女に謁見を求めること
とにした、

――夜。食事をしてると。

無粋な、影で、食事を邪魔する人がいて、
誰だ?、イライラしながら、顔上げる。

不敵な顔をして。くすんだ色の髪を、結い上げた、女の子が、腰に
手を当て、立っていた。
仕立ての良い、服装の少女を、場違いなと、怪訝な目で、目を細め
る。
「あの?、何か用ですか」
商人として、相手を、侮らないよう、にこやかな。仮面を作るのを
忘れない。
「バカじゃないの?、繕っても、あんたが何者か、バレバレだから」

小馬鹿にした口調。ガラの悪い喋り方に、いささか面食らった、
「君は、誰だ……」得体の知れない不安に、カウベルは、唾を飲み
込んだ。
「あたし?、ラウラ」
「そうか……。そのラウラさんが、僕に、何の用かな」

勤めて冷静に、相手を見るカウベルを、
クスクス笑いながら。
「用があるのは、あたいじゃないよ、あんただよ」
首を傾げ、眉をひそめた、
「言ってる意味が、分からないが…」
困ったな、頭を掻きながら、値踏みする。

――どんな子なんだ?、着てる服は、裕福な子女の物だが、
あまりに口が、悪すぎる。

「外交官の癖に、察しが、悪いね」
呆れたように、少女が、言ってのけた。
「なっ……」
血の気を失う。顔を。つまらなそうに、鼻を鳴らした、
「ここいらは、あたしらの縄張りだよ。うちの女王様は、あんたが、
城下に入った瞬間から、あんたのこと気付いてたよ」
「そっ、そんな……」
茫然自失の商人に、同情的な、目を向けて。
「あんたが、初めてじゃないさ、安心しな、それから……。密偵は、
捕まえさせた」
一瞬言葉に。詰まった。
「……、それで……、僕はどうなりますか?」
恐る恐る。少女を伺う。
「さあ〜?、スレッド侯爵が、決めるんじゃないかな」
「そうですか…」
懐にある。ナイフを確かめ、どうするか、迷う。
少女は、ニヤニヤとカウベルの反応を、見ていた。静かにただ、見
る。それが仕事だから、
ハッと顔が強ばる。少女の表情は、カウベルの考えを、見抜くよう
に、鋭く細まる。

息を飲んだ、もしかしたら……。
商人は――力で闘わない。
知恵で戦うのだ、だから理解した、
商人の感に従い。、
ナイフから。手を放して、立ち上がり。

「ラウラさん……でしたね。
どうか――謁見の申し込みを、お願いしたい」
深く。頭を下げる。

「良いよ♪。魔女さんも、そのつもりだしさ、ただシュレット宰相が、戻るまで、城で、待って、もらうことになるけど、構わないね」

正解らしい……。
急に、口調が変わり。打算的な……、
値踏みする。目をしていた、
カウベルは、今さらながら気付いた……。
ラウラの態度は、演技していたのだ、
自分こそ、値踏みされてたと知り。商人として、外交官として、
寒気すら、感じた。
「君は、いったい……」
「あたし?」
キョトンと、少女らしい、笑みを浮かべて、「ラウラ・ヘイドル
女官長をしてるよ」

愉しそうに、カラカラ笑われた、彼女の顔をみると、なんて馬鹿馬
鹿しい……、嘆息して、肩の荷を降ろした。

――――諸外国の送る密偵は……、

最初の報告を、最後に、誰も、戻らなくなっていた……、
そのため――王達は、様々な憶測を、巡らせる。

――魔女の魔法で、

エルガイア全土が、包んだ闇は、魔導王国ルアロの民を選別した、
奇しくも。バルタスの悪政が、国民の、変革を求める。気持ちと重
なり。すんなり、国の交代を、受け入れた、

バルタスの悪政と違って、魔女は、惜し気もなく、無償で、必要な
だけ食糧を、民に配給した。
さらに、職の無い者に、職を与え、
バルタスに追い落とされ。復職を願う、優秀な人間を、能力に見合
う、地位と名誉を与え。登用した、
一躍魔女は、国民の尊敬を集めた、

改革は止まらない。
魔女は、
子供のために、学校を作り、学舎を無料で、解放した、

次に、魔法医療の環境を整えた。国民なら、格安で、治療を受けれ
る政策と。それを成し得る施設を作る。
これに病に苦しみ、貧困に喘いだ民は、魔女を、崇めた、

魔女は、湯水の如く、金を使っても、まるで税金を上げない、
安い税金は、城下に商人を呼ぶ。商人が増えれば、品物が増える。
客が集まり、新たな仕事、雇用が増えた。

短時間で、魔導王国ルアロの経済が、上向いた。
商人は、金の匂いに敏感だ、恐ろしい伝説の魔女だろうと、商人は大陸中から集まる。

さらに、大量の魔石を、売買して、国政に、当ててる事実を、
『魔導師の塔』（ギルド）の商人から、耳にした商会は、買い付けに走った、
負けじと、大国の商人まで集まり、魔導王国ルアロは、
バブル最盛期である。今日も早朝から、
複数の商人が、城に詰め寄る。
表に出ない、魔女の代わりに対応する。
四人の女官長に、国を空ける。宰相、将軍、魔法学校長が、戻るまではと、
あっさり断られた、

しかし焦る商人は、
その四人の女官長に、すり寄り、
少しでも有利になる。口添えを頼みに、奔走したが、
四人の上司たる。
スレッド侯爵に、のらりくらり、
翻弄される。それ等の話を訊いて、当惑したカウベルは。
「私に、教えて良いのですか？」
不安を、口にしていた、
「ああ、大丈夫だよ。喋って、大丈夫なことだけ、教えられてるから」

「そうですか……」

感嘆の溜め息を、吐いた、
普通、自国の財政状況を、知られ無いように、苦心してるのが。幕
僚だ、密偵を使い。調べ、自国の有利な状況を演出して、条件を飲
ませるのが、外交である。カウベルは、いきなり自分の土俵が、通
じない事態に、苦心していた、
「あの橋に、いた鎧は？」
「ああ～。『動く鎧』（リビングアーマ）だよ」
「なっ…なんと」
気が付けば、場内。至るところに、配置されてる。
「あれは、あたしら以上の命令じゃないと、動かないから、平気だ」
「しかし……。これだけの『動く鎧』は、魔女様が、造ったのです
か？」
「詳しく。知らないけどさ。魔女さんじゃないよ」
「えっ……」
驚き戸惑うカウベルを、悪戯ぽく笑み。
「帰って来てないけど、うちの魔法学校長が、造ってるらしいよ」
「魔法学校長？」
知らない単語に、首を傾げた、

「魔女さんが、国中に学校作ってる噂。訊いてるだろ？」
「ええ……まあ」
「前の国は、優秀な人材を飼い殺しにしてた、だから学舎の一つに、
魔法学校を作ったんだよ。魔法学校長は、その先生らしいね」
「なるほど……。それにしても、この数は」呆れ果てる。まだ、軍
の編成途中だから、仕方ないにしても。

「ちょっとした数、あるらしいよ」
――それはまた…。
動揺を抑え、表情を取り繕う。

「もっとも、魔女さん曰く。魔法学校長は、魔女さん以上の魔法使いらしいよ」
「なっ……、それは、本当に？」
俄に、信じられない話だ、驚き勇む、カウベルに、肩を竦めて。

「さあ？、魔女さんの話だけだから、今一つ信用に欠けるけど、宰相は、あのシュレット・アルパーナだしさ、信憑性あるよね」
片目を、瞑り。愉しそうに笑う。
「あっラウラさん、丁度良かった」
幼さの残る。兵士が、戸惑った顔で、助けを求めた。
何事かと、見れば、
少年兵の向こうに。数人の兵士がいて。
三人の男女を、取り囲んでいた。
「どうしたのあれ？」首を傾げ、問う。
「はい……。あの三人が、いきなり、奥に入って行こうとしてまして」
自分達の手に、余る。そう言いたいらしい。
「しょうがないな…」
「すいません」
二人は、顔見知りなのか、少年兵は頭が、上がらないらしい。
「ちょっと待ってて」
「はい、分かりました」
――。時間は、少し戻る。

城塞都市ハルガで、シルベルト、キャリンを待ち。
エルガイア――魔導王国ルアロに入る。
三人を、待ってたのは、
アルフェリアに負けない、人、人、人、

予定より、戻るのが遅れたのには……。
切実な、理由があった。

シュレットは、兄に捕まり、3日3晩愚痴られ、さらに翌日、早馬で。駆けつけた父に泣かれ困り果てた。

終いには……。
砦に残るなら。戦後処理をさせられ、
気付けば、15日が、過ぎていた、どうにか、抜け出したシュレットは、
3日ハルガに留まり。遅れた二人と、ようやく、合流、色んな噂の流れる。
自分達の国？に、戻った訳だが……、

「場違いだ……」銀髪をぁ短く刈り込み、袖のない、東方の胴着を、着込みんで小さなリックを手に、呟くシルベルトに、

「確かに……」
頭一つ高い、シュレットは、旅装のフードで、顔を隠していた。
色々苦労したのだ……。

「キャリン疲れたニャ」

髪の1房だけ白く、頭の横で、結んでるキャリンは、眠そうな顔をしていた。

妹――ミルキー女王に可愛がられ。
毎日。夜中まで、キャリンの話を、ねだったらしい。

――困った妹だ……。
苦笑を漏らした。
城下に入ると、真新しい石畳が、街中に敷き詰められていて。馬は足を、気使わなくては、ただ商隊の荷馬車は。進み易くなっている。

「なんで、こんなに人がいるんだ？」
訝し気に、活気の街を眺める。

「早く行くニャ！。アイレット様に、ちゃんと、仕事出来たご報告するニャ」
「……」
「……」
急に、元気になるキャリンを、生暖かい。
半眼で、はっきり見た、キャリンの口から、涎が……、
向かう先から、美味しそうな匂いが、漂う。
「仕方ないな、キャリンが急ぐから、買い食い無しで」
「そうだな」
「ニャ、ニャニャ！、ガーン」
血色を失い、力無く、座り込み。ウルウル瞳に涙が、浮かぶ。

――やっぱりか、食道楽猫が……。

打ちひしがれる。姿が、なんとも哀愁が漂う。哀れに見えてきた、人狼に、目配せすると。小さく苦笑を滲ませ。頷いた。
仕方ないな……。「俺は、お腹空いたんだが……」
俯き小声で、呟いた瞬間。顔を輝かせ。
「キャ、キャリンに任せるニャ！」
嘘なんて、言われたら、堪らない、猫まっしぐら。
屋台に突撃する。
あまりの変貌ぶりに、二人は、苦々しく笑い見合う。

今回、キャリンも頑張った、そのご褒美だ……。1人ごちる。

「まさかこんな時間になるなんて」
「まったくだ、チッ」満面な笑み、下手くそな、鼻歌は、主たる少女と同じ。過去のトラウマから、
人狼は、不快そうに、眉間に皺を寄せ。舌打ちした。
対象的な二人を、苦笑混じりにみてたが、
内心、魔女の所業に、感心していた、

賑わう町。人々の顔に笑顔がある。耳にした噂は、悪い物ではなかった。

遅くなったので、屋台のオヤジに、城までの道を、訊いて、
三人は、大通りから、城に続く。道に出る。

城は、大きな掘りのある。要塞タイプの城になっていた……。
「うわぁ〜……大きいニャ」
大きな目を、丸くして、驚きの声を上げた。「これはまた……張り切ったな」
三人は、知っている。城が、生きてることを、

そして——自分の意志で、城は、自由に、姿を変えれるのだ。
「早く行くニャ〜」

三人が、商人に混じり、城内に入ろうとした、瞬間。
「そこの三人!、何処に行くつもりだ」
数人の兵士らしき、男達が、集まる。
「誰だ。お前達?」人狼の殺気混じりの声に、兵士達が青ざめた。

「きっ貴様、何様だ！」
いきり立つ、若い兵士の腕が、震えてる。
「あっラウラさん、丁度良かった」
兵士の１人が、走り寄る。
「仕方ないな」

呆れたラウラの顔を、恥じて、俯いた、どうやら頭が、上がらないようだ。
「そこのあんた達、何してるのよ？」

気の強そうな、少女がししゃり出てきた。
人狼（シルベルト）は鼻白み。
何とかしろ。シュレットに目配せした、
そっと溜め息、吐き出して。
「一応言うけど、兵士募集は、昼間だから、魔女さんの謁見は、断りよ」
腰に手を当て、薄い胸を張る。
苦笑しながら、少し考え。
「その魔女に、呼ばれてるんだがな」「はあ？、あんた達を」
少女は剣呑な顔で睨む。少し困り顔で、見てると、
商人風の若い男が、驚いた顔して、シュレットを見ていた、
「ん……（何処かでみた……あっ）君は、
セウリアのジーザ商会の商人だったね」
「あっやはり！」
嬉しそうに、近づいて来た、

「えっ……あんた、この不審者、知り合い？」
戸惑うラウラに、呆れた顔をするカウベルは、
『自分の国の宰相の顔、知らないの』
「へっ……、エ゛エ゛ーー！。あんた……。シュレット宰相！」

思いっきり、指を突き付け、驚きの声を上げる。
――あちゃ……本当に知らないんだ……。
自分が、してやられた少女に仕返し出来た、形だが、複雑な気分になる。「なっなんだって！。この方が、シュレット宰相……」
兵士達は、呆然と、槍を落とした。
「宰相ての、知らないが、俺がシュレット、隣が、シルベルト。向こうで、挙動不審なのがキャリンだ」
ズズンと。青ざめ立ち尽くすラウラ含めた、兵士達を、
笑えないな……。笑える訳がない
皮肉気に。１人愚痴る。

「大変失礼しました！」
両手を合わせ。深々謝る。ラウラに苦笑しながら、
「会った事がないんだ、仕方ない」
あっさり許され。
「あれ？怒らないの」
拍子抜けした、顔をする。ラウラに一つ頷き。
「さっき気になること、言ってたね」
「はい？、ナニヲイッテヤガリましたか……」大失敗の後だけに、
顔がひきつっていた、
シュレットとしては、気になった、話を聞きたいだけだが、
「俺のこと、宰相と呼んでたね」
「あっ、そのことでしか」
下手な敬語、思わずカミカミなラウラに。吹き出す。カウベルを、
悔しそうに睨み付けた、
「はっはい、そっ、ソウナンデスマスよ」

いささか可哀想になって、
「シュレット殿下、多少私が訊いてます。良ければ、答えますが」
「なるほど……」
「では頼めるかい……」
わざと空白を作る。シュレット殿下に、思わず嬉しくなった、深々一礼して、
「カウベル・ジーザです殿下」
商人が、国の幕僚――、
実質のトップ宰相に、顔を売る。チャンスを与えてくれたのだ、生かさない商人は、たたの愚か者だ、

ラウラに、訊いた限りのことを、三人に話した。
「なるほど……。あのバカのやりそうな、丸投げだな」

何とも、疲れた顔をして呟いたが、怖くて相槌出来ない。
「ラウラ、今日は遅い、明日スレッドに会う。部屋の用意を、人数分頼めるか」
「はっはいすぐに」
走り去る。ラウラを見送り、
「君達、よろしく頼む」
忘れ去られてたと、思ってた兵士達は、背筋伸ばして、
『はい！』
嬉しそうに、仕事に戻る。
――さすが、シュレット殿下だ、

一連の出来事を、兵士の人心掌握に、使うなんて、
カウベルは、商人として、最大の敬意、襟を唯した。

――――早朝。日課の訓練を、裏庭にある。演武場で、シルベルトと行っていると、

「お早うございます」ルアロの兵士達百人余りが、集まる。
「シルベルト将軍、今日から訓練。お願いします」
「……」
困惑して、何とかしろ。いつものお願いに、苦笑しながら、
「これで、全部かい？」
年嵩の中年兵士に、訊いた、
「いえ、スレッド侯爵の命で、三交代でして、夜勤した兵は休みになってます」
「なるほどね。そうだな……。
ならば丁度いいか」
ほくそ笑む宰相を不安そうに見ていた。
「皆に知らせがある。正式な発表は後日行うが、一週間後に、
賞金付き、武芸大会を行うと、シルベルト将軍のお達しだ、但し、
一般からの参加ＯＫ、優秀者には、昇進を認める」
おおおお……、ざわめく兵を一瞥して。待ってると、
「シルベルト将軍！、本当ですか」

意気込むのは、昨日の兵士だ、
「レイジお前…夜勤明けだろ」
「いいや～凄い話をしてるから、つい……」
ばつが悪そうに、赤くなる。
「ああ本当だ、なお詳しいことは、今日中に発表する」
「おっ、おれ！頑張ります」
「ああ期待してるぞレイジ」
名前を覚えられた、若い兵士は、歓喜のあまり、倒れそうにだ。
「全員武器を手に並べ！、順番に、シルベルト将軍に、打ち掛かり、
自分の弱点を探ること、二回りしたら、訓練を終わりにする。
いいですな将軍？」
「ああ……」ホッとした、シルベルトを残して、
スレッドの待つ、執務室に向かう。

途中で、王座のある。大広間から、ラウラが、出てきた、
「あっ、お早うございます」
慌てて、寝癖の付いた、髪を隠そうとしている。クセ髪なのだろう。
「お早うラウラ」

「宰相は、スレッド侯爵の執務室に？」
そうだと頷くと、
「一緒に行きます」
歩きながら、ラウラが元ストリートチルドレンのリーダーをしていたと、告白した、
「だからがさつで、申し訳、ありません」

昨日のこと、まだ気にしてたのだろう、見てると仲間に優しく、頼られる。姉御肌のようだ、おっちょこちょいな一面も、アイレットが、気に入った、一面だな、結論付けた、
「そうか、俺には可愛らしい女の子に、見えるが」
「かっ、」

真っ赤になって、立ち止まる。ラウラを置いて、
執務室に入った。

「おお！シュレット様、お久しぶりで、ございます」
厳格な眼差し、執事ぜんとした、以前と違い。侯爵に見える。白い物が混じった髪を、後ろに撫でつけ、
洒落たスーツを着流していた、
黒のスカーフが、以前の好みのままだが、
血色の良い肌、疲れの見える。顔、渋い……肉声？。
「もしかして、身体を作ったのか……」

疑似物に、魂を入れる。魔法が、あった……。
「そうでございます。いやはや、国とは、大変ですな……」

ホッとしたのか、厳しい顔が緩む。
「キャリンが見たら、抱き着くな」
「……既に」
「そうか……」
苦笑いした、
ノックの音がした、
スレッドが、入るように言う、
ラウラと一緒に、シルバーブロンドの、
貴族の令嬢のような、品のある。女の子を伴う。
「侯爵様、およびとか」
チラリ、シュレットを認めたが、敢えて言われるまで、問うつもりはないようだ。
「ご苦労様ミスト、ラウラ済まないが、カウベル君を、呼んでくれたまえ」
首肯して、ラウラが出る直前、妙に熱い視線が、気になった……。
「ミスト、こちらが、我がルアロの宰相、シュレット・アルパーナ卿だ」ハッと小さく、息を飲み、優雅に会釈した、これは?、スレッドを見ると、満足そうに頷き、

「ミストは、ルガイア公国の王族でしてな」言わんとする事を、察した、
「君には、宰相の補佐を頼めるかい?」

「はい……」
迷いのある声だが、了承した、
「シュレット様、会われた二人の他、アイレット様付きの侍女ファ

ナ、姉のソアラ、
今日は、レブルの町に行っておりませぬが、シルビアの五人が、おりますので」
五人は、アイレットが選んだ女の子達だ、クセのある。才能の持ち主か、納得した、

「早速だけど、兵が少ない、役職を任せられる人員が少ない。
だから、近々、武芸大会を開催する」「ほう、それはまた」興味深い提案に、目を輝かせる。
「ミストすまないが、、使えそうな、人間の何人か、心当たりあるか？」
自分に、話が回るとは、戸惑うミストだが、小さく首肯した、

「国内外に、武芸大会を告知する。準備も任せたい、至急集めて」
「はい」
退室した、ミストを見送り、スレッドを見ると、頷き。
「あの子は、暗殺者か？」
「はい、暗殺ギルドに、仕込まれる。直前でした」
「そうか……。バルタスがやりそうな事だ」
忌々しそうに、吐息を吐いた。
「で、あいつはどうしてる？」

「はい、例の病気です」
諦めた顔から、趣味の風呂で、洗いをしてるのだろうか？。
「ファナが、お気に入りでしてな……」
苦い物を口にした、そう見える。
どおりで……、
アイレットの魔力を感じない。
「向こうか……」
「竜仙境で、ございます」

「あいつは、わざわざ自分の趣味のために、アンダーグラウンドまで、行ってるのか…」
呆れ果てた。
「まったく……」
「まあ、悩んでも仕方ない、国を運営しろって事だろう」
「そうですな……」
いつものことか……、
「セウリアと同盟するか……」
「今は、セウリアの商会の力を使うべきですな」
「そっちは任せたい」
「分かりました」
二人には、見えていた、この先の戦乱が、
今は……敵が、攻めて来るより早く、国としての体裁を保つのが、
先決である。

――アルフェリア歴二年……。――アルフェリア歴三年。
セウリアが、魔導王国ルアロとの同盟を表明した。
騎士の国エルマも同盟の意思があると、
見られる。

――アルフェリア歴三年。
魔女を中心に、一大勢力になった、四国は、諸外国から、四国同盟
と呼ばれ、
大国からは、危険視した。

その年。ルアロの城下に、ジーザ商会が、
店を開く、新たな塩の流通に、
『呪いの森』抜道を、使わせることで、ルアロは、莫大な利益を上げた、
ジーザ商会は、四国同盟の流通を一手に、引き受ける。大陸有数の商会に、数えられることになった。

「さて、カウベル呼んだのは他でもない。塩の生産が、落ちてるね」

ギクリ、顔が強ばる。カウベルに、小さく笑い。
「手助けじゃないが、この本を、渡して欲しい」
「これは……？」
見たことのない文字が書いてある。書物に、首を傾げる。
「渡せば、分かります」
「はっはあ」
戸惑う、若きジーザの商会長に、肩をすくめ
「兄なら、意味が判る。気になるなら、訊いてみなよ。
懇切丁寧に、教えてくれるからさ」
「う〝っ……」
明らかに、嫌そうな顔をした、経験ありか、苦笑いした。
「はっはあ～、分かりました」
「ああそれと、スレッド侯爵が、内々に、お話があるそうです。彼の執務室に寄るように」
「はっ、はい……」のらりくらりする。老練なスレッドの外交が、苦手なのだろう、
ま～レイスの時から、あれだからな……。
同情した。
退室した、カウベルの後、ミストが
、書類を抱え、入って来た。

「もう用意したのか？」
「……」
口数の少ないミストは、色々な不安を、内に抱えてる。魔法医師は、言っていた。

書類を読みながら、
「使者は、何人だ？」色々含みある。言葉に、
「正式な使者は、エルマだけ、後の四人……」
「そうか、密偵のことは、シルベルトに一任させる。そのまま軍部に行き、千騎士長の任命がどうなったか、副官ザルバに、訊いて欲しい」
「はい……」頼りにされて、ほんのり笑みを浮かべる。

三年前の武芸大会が、主を失った騎士に。。若い兵士に、希望を与えた、

多くの兵を登用して、成功を納めた。武芸大会を、魔女アイレットも観戦して、大いに喜んだ。

そこで魔女は毎年、武芸大会を開催すると、明言した、
あれから二年……。

先日、第三回武芸大会が、行われ、
人員が、増えた。
軍部の再編成、役職者の選出を、頼んである。
「失礼いたします」
遠慮がちな、声の後、ムッツリした、石像のような、大男が、入室した。
「ライネルか……ん？」
部屋の中で、気配がした？。

咄嗟に。魔法を唱える。
すると――机の横に。ぼんやりした、人影が……ん？。
「キャリン。お前……何してるんだ？」
「ウニャ？、ニャニャー！、見つかったニャ」
青ざめるキャリンの、首根っこ捕まえて、
「キャリン様、生徒が待っておりますぞ」
「エエー！！。キャリンは遊ぶニャ、見逃して欲しいニャ」
拝むように、手を合わせる。キャリンを無表情に、見下ろして。無言のプレッシャーを与えた。
「ああ……。キャリンのこと、連れてっていいよ」
「ガーン……。」
落ち込む、キャリンに、
苦笑滲ませ。納得していた。
「嫌ニャ！、離すニャ、キャリンは遊ぶ――」
ぶら下げられたキャリンの叫び声が、城に木霊した。
やれやれと嘆息する。
今のは……、
見なかったことにした。

ライネルは、元ルガイアの文官で、ミストを密かに、
助け出した罪で、手配書を、出されていた人物だ、
見た目ああだが、実直な男だ、
ああもキャリンの手綱を、掴んでるのだから、
書類に混じり、アルフェリア女王の親書が、挟まれていた、

――親愛なる。兄様？

でかでか書かれてる。一文に、顔をひきつらせながら、目を通す。
――怒ってます！。

あれから二年。父上とハロルド兄さんとは、会ったのに――。
不貞腐れる。愛らしい妹の顔が、思い出された。小さく溜め息をついて、軍部の編成が、……一段落する。一度。母にも顔を、出さねばならないか……。

ついでに、セウリア国王ダーグに、謁見するべきだな……。なんて……言い訳するか、――悩ましい限りである。
読み終えた手紙を終い。凝った肩を、ほぐした、

フッと日が陰る。
国内の平定。軍部の編成、流通の確保。
国の形は、成したな。
「シュレット様、将軍と、ザルバ様が、新任の千騎士長を伴い。参ってますが」
シュレット宰相付き、小隊長レイジが、わざわざ報告に来た。
「通してくれ、」

ミストが戻ってない、まさか……私兵を使って、
シルベルトの代わりをしてるんだろうか？、
困ったなと嘆息した、暗殺者として、才能あったミストは、シュレットの密偵頭を、兼任している。
出来れば……、秘書だけに専念して、欲しいが、人員不足は否めない。

ほどなく……。赤髪の少女は、冷たい印象を与える。

メガネをズイッと押し上げ。財務を一手に、引き受けるシルビアが、
四人の人物と入って来た。
「宰相、お話があります。将軍達と終わりましたら、すぐに確認して欲しいことがあります」
「分かった、控え室に…、カウベルが、持って来た、先月の決裁の確認を頼む」
「すぐに……」
顔色変えず。さっさと出る。やや戸惑う二人が、
新しい千騎士長だろう。
手元のライネル補佐官の苦言が、目に止まり。危うく、吹き出しそうになる。
「どうしました、シュレット宰相……」
おどおど挙動不審なザルバが、血色の悪い唇を紫色にしながら、不安そうな顔をしている。
「いやなんでもない……」取り繕い、ライネルの苦言に、さっと目を通して、

――ライネルには悪いが、
問題の生徒と、キャリンのことは一任しようと、決めて。
四人に、向き直る。
「そちらが、我が国の新しい将か？」
シルベルトに。視線を向けると、無言で頷く、これに慌てて。
「はっはい、こちらの二人は……」
ザルバの合図に、新任の二人は立ち、
「シーノ・キリクです」
「ロザーン・ブルグだ」
シーノは、東方の刀を腰に、差している。髪も多少赤いが、黒を基調にした、東方人であろう。
ローザン・ブルグ？。ブルグ家って、確かエルマの名家の出か、

騎士らしく、精悍な顔立ちをしてる。そのことを伝えると、ローザンは、いたく感激した、武骨な笑みに、好感が持てた。
「シーノは、忍びかい？」
ハッと驚く顔をした、彼女の刀は、短く、切ることより、差す毎に特化してる。そう……印象がある。
微かに驚いた顔を見せた。
「ご存知でしたか……。父が」
なるほど、セウリアには、東方の人間が住む。村があったな、
一つ頷いて、二人を見る。かなりの使い手だ、納得して、
「シルベルトの力に、なってくれ、頼むぞ」頭を下げる。

「はっはい！」
「はっ」
武骨なブルグは、真っ赤な顔をして、喜びを隠しきれない様子に、
シーノが、呆れた顔をして微苦笑。浮かべていた。
「ザルバは、仕事が済んだら、顔を出すように」
「はっ……はい」
青ざめた、顔を、強ばらせた。

四人が出てすぐに、書類を抱え。控え室に向かう、途中お茶を侍女に頼んだ。

――部屋に入ると。既に、決算書、決裁書に、目を通して終えたシルビアが、顔を上げた、満足そうな顔をしていた、
「お茶を飲んだら、話を聞こう」
運ばれた、焼き菓子を摘まみ。嬉しそうに、シルビアが頷く。
こう見えて、甘い物好きの女の子だ、
冷たい印象が強く……。損をしてる。

「来月実施予定の訓練費用に及び、新設の部隊の寮について、だね」

「はい、新設の魔法兵団の長も、決めませんと」
再び冷たい印象を与えるように、メガネを人差し指で押し上げる。
「新しい千騎士長シーノに、やらせればいい、彼女かなり使い手だ」
シルビアは、眉をひそめ、考え込む。
「それで……。よろしいのですか？」
懸念に一つ頷いて、種を明かす。
「ああ、千騎士長は、1人の予定だったんだ、二人にしたのは、新設部隊のためだよ」
なるほど、感心した溜め息をついて、
「では……そのように」
「ああシルビア、来月セウリア、アルフェリアの王と、謁見に向かう、そのつもりで、準備を頼む」
「……はい、分かりました」
やや困った顔をして、退室した、

執務室で、夕食を、食べ終えた所で、ザルバが、入って来た。「あの者に、会いに行くぞ」
突然の宣言に。色を無くした。
「なっ……。それは」
悪巧みする。宰相の笑みに、顔を、ひきつらせた。

――ことは5日前になるか……。

昨年の武芸大会優勝者のザルバだが、
普段の挙動不審、血の気の無い顔で、
お飾り的な、副官だと思われてる。
だけど、可笑しな才能があって……言わば。
〝不運〟

これに尽きる。
調べた所。ザルバはエローラの出で。
常に疎まれていた、
それと言うのも。補給部隊の小隊長だった、ザルバは、初めての戦で、その才能を発揮した

なんと戦線が、極端に縦長になり、補給部隊のいる後方が、穴だらけに……。
気が付けば、補給部隊なのに、最前線で、戦うはめになる。
そんな話は序の口で、
――ある時は、旅で寄った村が、山賊の村で、命からがら逃げた、
――またある時など、守備隊に、移った日に、砦が襲撃される。
命からがら助かった。
――さらにある時など、城の警備に、出れば、暗殺者と鉢合わせ

――可哀想なことに。休みに出掛ければ。どしゃ降りに見舞われ。
たまたま雨宿りした、小屋を、裏庭の岩山が崩れ。死にかけたりと。
聞いてるだけで、ちょっとした、小説が、書ける。

シュレット、シルベルトは、納得して、ザルバを副官に、任命した。
すると……、その日から、諸外国の密偵を、見付け、捕縛を繰り返した、今では、シルビアの部隊が、いるから減ったが、面白い才能ではある。
――問題は、5日前、
〝不運〟で、

呼び寄せた、侵入者を捕まえた、だが相手が、少年だったのもあり……。

ザルバの一存で、逃がした、
話は、それで終わらない。
昨日まで。四度。少年は、侵入を試みて。
四度。ザルバと鉢合わせ、捕まり。逃がしたを三回まで、続けた。
今は、地下牢にいるはずだ。シュレットが、少年の人間離れした、
敏捷性と、腕力を訊いたから、ザルバに捕らえとくよう言った次の
日に捕まえたらしい。
呆れた執念と、苦笑した
地下牢に降りて、

――鉄格子ごしに、少年をみた、
痩せた身体、薄汚れた衣服。浮浪者にしか、見えない格好だ、
だが目は、鋭く、殺気だっている。
意思の強そうな顔を、伸びた銀髪が被う。
「この少年です」
ザルバを見た瞬間、犬歯の発達した、口元が、悔しそうに歪む。
プイと、横を向いた。
「殺しに来たのか……」
小刻みに、腕が震えていた。バルタスの悪政による。被害者たる少
年は、恐怖を飲み込み。不安を押し殺す。
「ああ～やっぱり、獣人か」
「なっ！」
考えれば解る。凄腕の暗殺者、密偵でないのは、身のこなしを見て
れば分かる。
それに――生きた城を出し抜くのは、難しい。
となると……。
城知ってる誰かと
とても似ている。可能性だ、

それに……、
少年の容姿は、魔女の探し人。そのままだ。
「ソアラは、元気だぞ」
今度こそ、驚愕に色を無くした。

少年が、落ち着いた所で、牢屋から出した。ザルバには、黙ってるように伝えて、帰らせる。

執務室に、少年を連れ戻り、
レイジを呼び出して。少年を、風呂に入れさせ、こざっぱりした、
「先に、食べたまえ」「おい！、その前に教えろ、ファナはどうしてる」
腹が、空いてるだろうが、それを訊くまで、食べようもないな。
そっと嘆息して、
「二人共、うちの魔女の侍女をしてる」
「ほっ本当に！」不安と安堵で、グウ腹の虫が、主張した、
「詳しく、訊きたいなら食べてからにしろ」「……分かりました」
急に、素直になると、がつがつ、凄い勢いで食べ始めた。
やはりと言うか、肉、好きらしいな、
微笑したて見ていた。
しばらくして、ミストが戻り、少年を怪訝な目で、見たが、
「シュレット様、捕まえた密偵、そのままファナに引き渡しました」
「そうか、ご苦労――」
答える前に、風が動いた。
「なあ、あんた！、ファナを知ってるのか」シュレットの目で、
捉えるのに。苦労するスピードで、
ミストの肩を掴む。
「シュレット様、彼は？」
驚き戸惑いが、顔に浮かぶ。
「ソアラの兄だ」

「彼が……」
納得したミストは、唇に微かに。微笑を讃え。
「二人は、同僚よ」
「本当だったんだ……、良かった」
少年がへたり込む。にミストが、問う目をした。
「まだ、帰ってないなら、二人を、呼んでくれ」
「はい、ただちに」

床に、座り込む少年を、椅子に座らせ。
落ち着くのを待つ。
「訊いていいか、あんた何者だ」
ようやく意思の強そうな、目を取り戻した、
肩を竦めて見せ。
「この国の宰相、魔女の次に偉そうな、男だよ」
笑い含む言葉に、目を丸くした、
「あの二人は、魔女に、お前を探して欲しいと、懇願してたらしいぞ」
「そうか……」

複雑なおもいを、抱えてるのだろう。
「ソアラ……、俺と違って、獣人の血が、少ないから、目を……」
「そうか、お前は、働きにセウリアに、行ってたらしいな」
「うん……でも、こんなことに……、なってるの…知らなくて、」
だろうな……。そうそうあっても困るが、
皮肉気に、苦笑を漏らしながら、
「心配で、城に、侵入したと？」
「うん……。二人が、心配だったんだ」
なるほどね。頷き、
「獣人は、君達二人だけか？」
「うん、母ちゃんは人間だったんだ、だから二人だけ、父ちゃんは

生きてるて、母ちゃんが、言ってた」
「そうか、お前は、人狼か？」
「そうだよ」上げた顔を、
見て、目元が、似ていると気付いた。

――ん……。これは面白いことになるか、

なら――アイレットに――口止めして……。ほくそ笑み、
「良かったら、仕事をしないか」
「えっ……。獣人と、知ってるのに？」
キョトンとした顔は、歳相応だ。
「獣人なら、結構知り合い、いるよ」
「えっ……」
言ってる意味が、分からない、顔に出てる。
「あんた、変わってるな」
「そうだな、魔女の家来をしてるくらいだ」
肩を竦めて、おどけるように、言ってのける。
さすがに呆れたが、顔を引き締め、決意した顔をした。
「分かった、俺やるよ」
「そうか……」二人が……、
来るまでの間、どんな仕事をするか、簡単に話して聞かせた。

少年をシュレットの下で、訓練を積ませ、簡単な仕事をさせるつもりだ、ビーノの資質次第だが、獣人は、生まれながらの密偵だ、上手く育てれば、面白い、密かに、シルベルトの嫌がらせになるなと、笑う。
――失礼します。

ミストの声で、我に返り、
入室を許可した、

目付きの鋭い、普段から、警戒心剥き出しのファナ、
隣に、薄い金髪に合わせ、魔石で造り出された、魔導具を額に着けてる。幼い容貌のソアラ、弱い視力の補助アイテムだ、
ビーノを認め、顔を輝かせた、
「お兄！お姉ちゃん、お兄だよ」
うっすら、涙を浮かべる。妹の頭を、優しく撫でて、鋭い眼差しが和らぐ。
「ソアラ……。お前……。俺が、見えるのか？」
茫然自失、ふらふら妹に、近より……割れ物に触れるような、兄の手を、くすぐったそうに、はにかむ。
「たく、心配させやがって……」
ツンと明後日の方に、背ける。ファナに、

――ごめん……。
ばつが悪そうに、俯いた。

三人が、落ち着いた所で、ビーノが、シュレットの仕事を、手伝うことを伝え。
三人を、下がらせた。
ファナに、金を渡し、明日1日二人を、休みにすると、伝える。
目を丸くした、ファナに、
肩を竦め。小声で、
『ビーノに、どんなことをしてたか、話す時間、必要だろ？』
『ありがとうございます。』
可愛らしく、笑い。、二人の元に急いだ。

「宜しかったのですか？」
少し羨ましそうな、目をしていた。

「ああ……、明日の昼、ライネル補佐官を呼んでくれ」
「……はい」
「次の休みは、君だから」
「えっ……、はい」
ほんのり、嬉しそうに唇を緩めた。

――翌日。

ライネル補佐官が、石像のような、顔を無表情に、苦言を聞いた、
魔法学校に、評判の双子がいる。
いわゆる天才で、並みの先生では、手に余る。
そこで二人の母が、キャリン直々に、教えて欲しいと色気づく。
――無謀だ、

苦笑した、宰相に、ライネルは大きな手を、頭に乗せ、うめいた、
普通なら破綻するはずが、
キャリンと波長のあった双子は――。

悪戯三昧の日々と、頭の痛い話を、訊かされたのだ。
「あの能天気猫娘は……」
悩ましい限りだが、
「ライネル実はな……」
来月、アルフェリア、セウリアの王達に、謁見する胸を伝え。
双子を、連れてくと伝えたのだ、
「いったい何をなさるつもりてすか……」
「本物の天才に会わせるのさ」
妹ミルキー、兄ハルフェスと、変わるか分からないが……、

第7の『神の代行者』の章

――時は、戻る。

シュレット皇子が、
地下迷宮アンダーグラウンドから、生還して、半年……。
キャリンを、連れて、旅を続け、実地の家庭教師をしていた、

エルガイアの東に、森が広大に広がる。
人々に、『呪いの森』と呼ばれる。森の奥深く、『魔女の城』はある。

二人が、城に入るなり、辺りが暗く、冷気に包まれた。現れたのは、
レイスと呼ばれる。アンデットで、
『これはこれは、お帰りなさい』
にこやかに微笑した、
「ただいまニャ、アイレット様は、どこニャ？」
『うむ、ただいまシルベルトと、図書館で地図を、調べております』
「分かったニャ、先に行くニャ♪」
とてとて走り出した。
スレッドと見合い。
思わず。苦笑を漏らした。
『今回はどちらに？』
「ん、東方のシゲンに、珍しい本があるアイレットに頼まれてね」
『これはこれはまた、遠い国へ……』
お茶を。用意しましょう、
スレッドは、消えた、
二階にある。自分の部屋で、荷物を降ろして、背負い袋から古文書を、取り出した。
いずれ兄ハルフェスに、渡す機会があれば、容易に、塩の精製が、

楽になるだろう……。
ひとまず。渡せるか、分からないが、
……いつの間に。

寝ていたようだ、テーブルに、軽食とお茶が置いてある。
「シュレット起きてるニャ？」遠慮なんて知らない。キャリンは、入ってくるなり、
「お菓子ニャ♪、食べたいニャ？」

目を輝かせた、頷いてやると、上機嫌に、食べる。
食道楽な猫だ、呆れながら、お茶をキャリンの分も入れてやる。
「用が、あったんじゃないのか？」
「あっそうだったニャ！、アイレット様が、図書館で、呼んでるニャ」
「そうか……、身支度するから、お前は、お菓子食べてろ」
「分かったニャ」
喜色満面に、お菓子の消費に走る。

身支度を、整えたシュレットと二人、
図書館は、一階、二階の奥の部屋にあって、吹き抜けのかなりの大きさになっていて、
数万冊の蔵書があった。図書館の、天井付近か、魔法の水晶が吊り下げられ、
人が入れば自動的に、明かりが点く、魔法が掛けられている。

――中央に、古い古文書を壊さず。広げ見れる。大理石のテーブルがあって、
二人は古文書を挟み。唸っていた、
「アイレット様♪、シュレット呼んで来たニャ」

「あっ、丁度良かった、これ見てくれるかしら」
顔を輝かせる魔女の手元には、古い地図が広げられ、今の国と名前こそちがうが、
大陸の物で、
魔女が、指す場所について、調べてるようだ、
「ここが、どこか解りますか？」
チラリだいたいの地域、現在の国、覚えている。大陸地図を、
思い浮かべて、
「多分、その地域は、地殻変動で、大陸から群島になってるよ」
「えっ……地殻変動ですって！」

驚きを滲ませる。魔女のために、羊皮紙を取り出して。
地殻変動が、あった地域に。
現在の地図を書き出して、
見比べさせた、
「道理で……。見つからないはずね」
呆れた口調で、人狼と見合い、苦笑した。
「現在は…セウリア？」
訊かない名前なのか、困惑気味に、笑い、
「シュレット、調べて欲しい。集落があるんだけど……」
上目遣いの猫なで声、はっきり言って、不気味である。
「何て集落だ……」
諦めて、手伝うことにした。
――１０日、掛かり。
セウリアの島の一つであると、解り。
「じゃ、シルベルトと、『神の代行者』倒して来てね？」「えっ……。俺が…」
「うん♪。キャリンに実戦積ませたいから」
言い措いて。シュレットの顔を、睨むように見ながら。
「あの子、魔導兵造（ゴーレム）れるようになってたし」

「うっ……。マズかったかな…」
「べ～ツに（キャリンのこと、羨ましいなんて、言えないでしょ）」
妙に、不機嫌に、鼻を鳴らす。
「お早う～ニャ♪」

にへら寝惚け眼で、魔女に抱き付いた。
「もう、お昼よ？、まったくしょうのない子ね」
キャリンの頭を膝に抱き、懐から、東方の櫛（キャリンのお土産）で、髪を鋤いてやる。「ウニャ～ン♪」
ゴロゴロ喉を、鳴らす。ご機嫌である。
「それにしても……」じっとりした目は、
豊かな、キャリンの胸に……。
「むむ……。クッ（負けてる」
薄い自分の胸を、見下ろして、
唇が、わなわな、悲し気に震え。
「このこの！」

何やら、苛立ち紛れに、キャリンの胸を、つつく。
「ニャハハ、くすぐったいニャ～♪」
恥ずかしい。女の子同士のやり取りに、ギロリ、なぜ俺を睨む？。
小声で。
「何で、こんなに大きいのよ……」
ぼやきが聞こえたが、可哀想で、
聞かなかったことにした。
「そこ！。失礼なこと、考えたでしょ」
「さあ～、なんの話デスか。なぁシルベルト？」
顔を引きつらせ。人狼は、コクコク真剣に頷いた、目は、俺に振るなと必死である。
「おかしいな～。魔法薬（ポーション）効かないし……」
切実らしくて、シルベルトの気持ちを、理解した、

……タブー。

とても危険だったらしい……。

俺の身が、朝から、嫌な、汗をかいた。

『アイレット様、『瞬きの扉』の準備が、出来ております』

「そう、ありがとうスレッド」

珍しくタイミング良く、現れなた。失礼なこと考えてると、

魔女の城には、外に出れる。特別な魔方陣がある。

三ヶ所の出入口があり。使う時は、調整が必要なのだ、

ジロリ、色んな含みある目を向けて。

「一応……。気をつけてね」

プイとそっぽ向いて、怒ったように、

……言われてもな。

「解った」

「ん……」

手を差し出した、

あれからアイレットは、手にキスを求める。

いつものように、女王に拝した騎士のごとく、片膝着いて。恭しく

手の甲に、キスをした

「あっ……」

ほんのり赤い顔して、嬉しそうに、はにかむ。

――城の地下。魔方陣が、明滅している。

アイレットの研究所だ。キャリンの作った魔導兵、鉄の魔導兵が（

アイアンゴーレム）
コミカルなおめめを、ムムムと、
にらめっこしてるのが、グリフォンの石像（ストーンゴーレム）
が、研究所に安置されてる。キャリンは、いつでも呼び出せる。

気になるのは、
キャリンが造ると、
何故か――幼児なみの知能が備わる。
――規格外だよな…。魔導兵としても。
嘆息しながら、三人が、魔方陣に入る。

明滅が激しくなり、
三人の姿は……消えた。

――――☆☆☆。

光が、消えると、
東の街道付近にある。崖の下の小屋。
海の近くに、出現した。
「うわ～☆、海ニャ♪」
キャリンとの旅で、
――東方シゲンに、行って以来か……。

皮膚に、刺さるような太陽の光、焼かれるような、ジリジリ感が、
汗を誘う、
「あんたはどうだ？」「いや……」
口数の少ない、人狼と行動するのにも、ようやく慣れた。
旅に同行することもしばしば、

『神の代行者』との戦いは、初めてになる。――地下迷宮の六魔王より危険なのか？、
それが問題だ、

三年、地下迷宮でさ迷った時間。亜人の村、町で、様々な出逢い。
別れを経験した、
中には、『契約者』のなりそこないの二人に会い。
六魔王と、戦うはめになったんだ……。

思い出したくもないが、
多分シルベルトは、最近海辺の国に、行ってない、そう言いたいのだろう、
「セウリアの首都は、街道に出て、南東の端、半島にあるから、
この辺りは……。ファンゼの近くだから、
キャリンの足で6～7日か、ファルス喚んで、早めるか？」
眉間と鼻に、皺を寄せて、聞き入る。シルベルトに確認する。
「いや……」
今度のは、調べ物もある。構わない。そう言った、意味だろうか？。
「なら、街道を東に抜けて、ラノビアに寄らないか？」
「ん……？」何故だ？、そう聞いたのだろう、
「たんに懐が、寂しいから、交易品を売りたいんだ」

「そうか」
了承に小さく頷いた、
今まで、シルベルトだけに任せていた、
魔女のアイテム売買、何せ、外に出れるのが、シルベルトだけだったが、
口下手な上、あまり深く考えない性格で、
高価な、魔石、魔法道具を破格の安さで売買していた、
だからではないが、

そっち方面に明るい。シュレットは、個人で（商人証）を持っていた、名を代えてたので、そのまま使ってるが、『魔導師の塔』発行の特別品で、大陸全土。如何なる国の町、村で、売買可能だ。
メダリオンの所持者は、一つだけ、願いを叶えて貰える。限度はあるが……、
シュレットは（商人証）を貰い受けた。

シュレットは、レギオンの街に、商会を作り魔導師に向かない。若者に、仕事を与えた、ただそれだけだったが、
あれよあれよと、
多額の利益を生み出した……、
本人は、知らぬ間に、商会は、新人魔導師の学舎に、格安で、金を貸した、

シュレットに、恩を返したいとの一念でのこと……、

さらには、ギルドに、投資をして、レギオンの街の建設に、多大な貢献をしたのだが、
本人は知らない……。
回り廻って、妹の手助けをしたなんて。
この時……、知るはずもない……。
――3日とせず。ラノビアに着いた。

ラノビアの街は、塩湖に近く、海と川両方の魚が取れる。街は、珍しい特性の湖に、目を着けたのか、
真珠の養殖に、力を入れた。
……多少なり、成功したと、聞いている。
いずれ、セウリアの交易品になるだろう。

街に入る時、商人、旅人は、一定の税を収めなければならない。

町と、違う理由もある。
街は、商人の使う、交易品の中継地で、
買い付けに、訪れる。大概の商人は、
その日に、出てしまう。
すると街に、落ちる金が減り、街道の舗装、街の整備は、街の財政を逼迫させる。
そのため街は、税金を取り、整備に使う。

一方で――、

真珠の養殖で、交易品を担えば、莫大な利益を上げられ。

――今以上に、仕事が増え、人口も増える。街の入り口に、塩湖で取れた、魚を焼いて、旅人の胃を刺激した、
「二人は、適当に、買い食いしてて」
「分かったニャ♪」
満面の笑みのキャリンと、対照的に、疲れた顔で、小さく首肯した人狼に、金を渡して、商人の店が並ぶ、街の西側に向かう。
ラノビアには、ジーザ商会の本店がある。
主に、塩を扱う、ジーザ商会だが、
街では、様々な店が並ぶ。
レギ商会の看板を、見上げ、中に入る。
「いらっしゃいませ」線の細い、商人に見えない、男が帳場を預かってるようだ、
値踏みする眼差しに、（商人証）を見せると、表情が一変。
「こちらにどうぞ……」
恭しく。奥の部屋に、通され、
「ラノビアの商会長、アルマンです。貴方は……！！」
（商人証）に記載される名前を、驚愕の目で見ていた……、

レギ・ブランドル、
レギ商会、創設者の名で、シュレットのもう1つの本名である。
「貴方があの……」
息を飲み惚ける。
アルマンに、少々戸惑いながら、
「売買を頼みたいんだが、構わないかな？」「はっはい！」
喜色満面に、アルマン商会長は、頷いた。

シュレットは、魔女の城に、捨てるほどある。
石から、質の良い、魔石と、東方で、手に入れた、染め布、茶器と、
背負い袋から、大量に並べた。
唖然と、口を開けたままのアルマン商会長に、
「魔法道具（マジックアイテム）だ、この中は、倉庫に繋がってる」
「なっなるほど……」
感心していたが、品物を扱うと、表情が一変した、
「しばしお待ちを…」荷を運び、別部屋で、鑑定をする。
商会では、信用を売るため、大きな取引は、鑑定から始まる。
「これで、全部でしょうか？」
「染め布が１８反、茶器はあれで終い。魔石は質の悪い物１００、
良いのが１０はある」
「そうですか……」
悩むアルマンの頭に、あるのは、
商会にある貨幣と、これを売り払うあてを、天秤に掛けている。

そこで……、失礼にならない程度の、
「今回、売買が目的でないから、足りない分は、真珠でも構わない」
譲歩を提示する。

明らかに、ホッとした顔をした（何でだ？）
「喜んで、お預かりした品は、買わせて、いただきます」

恭しく一礼して、握手を交わす。
取引終了である。

ラノビアの真珠は、
まだ、有名では無いも。西方ドマルキアなら、珍しさから、高値で
売買されてる。
との情報は、ある商人から以前買ってある。
旅を続けるなら、
交易カードが、いざと言うとき、助けになる。
――保険だが……。
運ばれた、貨幣の箱は、三箱、全て銀貨である。
箱１つで、半年は、豪遊出来る。金額になる。重量ある箱を、
背負い袋に、仕舞う。
今日は宿を取り。明日王都のサレスを目指す。

――４日の旅程で、

サレスに着いた。
ラノビアのアルマンから、紹介状を書いてもらい、
王立図書館で、目的の集落を探した

館長と顔見知りになり、地殻変動前の集落を、探してる事を伝える
と。地理学者を、紹介された、
「ほうほうなるほどね」
真っ白の顎髭をしごきながら、
とても古い地図を、シュレットに見せる。
過去あった地名を聞き、驚き目を丸くした、
「神の集落ラボーナ」
懐かしそうに、目を細めた、

地理学者こそ、ラボーナに住んでいた、最後の住人で、
島が何処にあるか教えてくれた。
「わしは幼かったから、入れなかったが、
島の東に、入江があった」入江は、ほんの僅かな時間だけ、入り口を開き、
成人を迎えた、若者が、祭壇まで行く。
そんな話で、同席したシルベルトは、明らかに不機嫌な顔をしていた、
何か理由がある。そう直感した。
翌日。食料を買い足して。
サレスから、
北東に――5日。
漁村ケストに着いた。
ケストから半日、行くと。アルデナと言う。リゾート都市がある。
兄ハルフェルの屋敷は、ケストとアルデナの中間にあるため。
ここからも見える。

錆びた匂い。魚が放つ異臭は、
珍味の干し魚で、干物と言う品だ、
日持ちさせるための、加工品だ、
「うわ～凄く良い匂いニャ♪」うっとり嬉しそうなキャリンを、
信じられん。首を振りながら、鼻を押さえている。
刺激臭は、嗅覚が発達してる。
人狼だけに、辛いのだろう……。
「お嬢ちゃん、良かったら、焼きたて食べるかい？」

安宿のおばさんが、豊満な腹を揺らす。
「うん？食べるニャ♪」
一階が、食堂兼、飲み屋をやってる。

一泊。食事ありで、三人。
銀貨一枚と破格。
ただし部屋は、大部屋だが……、
買い付けに来る。
アルパーナ、ア・フェリアからも来る。商人には、安く休める宿は、
助かる。

金を別に払い。頼めば、船を出してくれそうな、漁師を紹介してく
れないか、頼む。
「あんた達。あの島に何しにいくだ？」
「はい、あの島に住んでいた、
ある老人に頼まれ、お参りに……」
不審がっていた、おかみさんは、
「ああ、あの学者先生かね…。」
知ってるようだ、

確か――12～13年前に、この村を、訪れたことがあると、訊い
ていた。
「任せときな、安くするように、言ってあげるよ」
「助かります」

――翌日、日も昇らぬ。早朝。

威勢の良い。声が、あっちこっち村に、響く。
まだキャリンは、起きない。
「少し、いいか？…」
「ああ、構わないけど、何？」
桟橋に、若い漁師が、網を積んでいる。

「あの島にいるのは、冥界の入り口を、開けた『神の代行者』が、
……いる」朝に。似つかわしくない。殺気を込め呟く。
「なるほどね……。あんたは、なぜ『契約者』になった？」
目が……、悲しそうに揺れた、
まだ、キャリンは、起きない。
仕方ないので、キャリンを背負い、
桟橋に向かう。
早くも――漁から戻り、魚を降ろす船もちらほら、
宿の女将が言ってた、老漁師の船に乗る。

――漁船には、若い漁師が、二人。
忙しそうに働く。

――目的の島。
『神の集落ラボーナ』に向かう。
「今の季節。海流が、外れてな～、あの島に行けるのはわしだけよ。
ひょひょ」
奇妙な、笑い声をたてる。
「島まで二フィス（二時間）くらいかの～」茶目っ気タップリに片
目を瞑る。

何故か……、
老漁師は、
シュレットの顔を、ちらほら見る。
老人は、海焼けして、体格のよいガッシリした、海の男で、
ガシガシ頭を掻く、指先は、傷だらけだが、人好きのする。優しい
目をした人物だ、
「まあ～慣れない漁師だと、海流に飲まれ。東方シゲン、冗談か分
からんが、ハルド興国まで、流されたって、話もあら～」
サラッと恐ろしい事を言う、セウリアから、帆船で１０日以上――。

掛かる島国だ、
冗談にしては、笑えない……。
「うわ～♪、おっきな魚ニャ～？」
黄金色の朝日に、誘われたか、銀色に輝く、小魚が海面を跳び跳ねる。
「おっイルカじゃな、あいつ等は、群れで、狩りをするんじゃ」
イルカの群れが、小魚を囲むように、回游していると、一頭が、波間を飛ぶ。
「凄い……」
息を飲んだ。
「すごい！すごい！凄いニャ！」
興奮したキャリンは、船の縁ではしゃぐ、
「大丈夫かの？」
老人の心配そうな声に、首を傾げると、
一際大きな波に、乗り上げ、軽く浮遊の後、大きな水柱がたち、
海水を適度に、浴びて喜んでいた。
「元気な娘っ子じゃて」
くしゃくしゃ、破笑一笑した、優しい眼差しは、孫を見るようだ。
寛容な老人に、軽く頭を下げた、
「すまんな……、黙ってようと思ったが」
照れくさそうに笑い、「お節介だが、似ておるな」
ハッと目を見張る。
老人が見た島は……。
「ハルフェル様に、似ておる」
優しく笑う、気付いてたかと。
小さく嘆息して、迷う。
「三年ですな……」
老人は、下の姫様が、見えられたと言った、「……元気、でしたか」
誰かとは、言わない。身体が震えそだ、
「目元が、ソックリですな」

みなに、言われたことだ、
懐かしさに……、
涙が出そうだ、
「変わり者(ハルフェル)は元気ですか？」認めた……。
困った顔をして、老人は苦笑した。
「あの通りの方、ですからな……」
親し気に、茶目っ気タップリ、片目を瞑る。思わず吹き出した。
「おっと……」よろけるシュレットを、ガッシリした老人が支えた、
甲板が、海水で洗われ、足元を濡らす。
「ブニャ！、ビショビショ……」
なんとも情けなさそうな、キャリンの声が、
「あっ……」
老人と見合い、小さく苦笑した、

背負い袋から、タオルを出して、渡す。
「着替えは、島に着いてからな」
「うっ……、分かってるニャ！」
恨めしそうに、ぷんとソッポを向いた、
まるで子供だな、
アイレットに、ソックリだ、嘆息した。

――島が見えたぞ。

若い漁師が、ドギマギ、顔を赤くして、キャリンから、目を離す。
濡れた身体で、クッキリ胸の形が、分かる。目の毒だな……。

船から降りて、
壊れかけの桟橋から、船を見送り。

――なだらかな、坂道を登る。

鬱蒼と、繁る雑木林から、集落が見てとれる。
目的の入り江は、船が入れない、岩礁で、行くなら、わざわざ集落のある。坂を登り。
反対側の崖を、降りなくてはならない。

崖の上からなら『浮遊』の魔法で、
落下して早いが、それまでが、一苦労である。

入り江まで『浮遊』で降下して、
干潮で、入り口の開いた、洞窟が、
入り江の奥に、あった。

「光よ」
短いワードで、3つの光球を作り、浮かす。一つを前に、飛ばした。
「うわ～真っ暗ニャ♪」
東方の着物に、着替えたキャリンが、
嬉しそうにはしゃぐ。猫か……猫だけに、
暗い。狭い。
が――――好きなんだ、

洞窟の途中に、エアーポケットのような、広い空間に出て、
地下に降りる。階段を発見した。
長い年月と湿気で、階段は苔に覆われ、滑りやすくなっていた。
「足元気を付けて」
「はいニャ♪」

急勾配の階段を、下まで降りると。
横に、広い空間があり、上の洞窟と、島の大きさと、リンクしない。

――魔法か？、
強力な魔法で、空間を広げてる。
独特の違和感を覚えた、
「あっ、消えちゃうニャ」
３つの光球が、明滅して消える。
既に三フィシス（三時間）が、過ぎてる。時間の感覚が、ずれてるのか、
「光よ」

今度は、数を増やして、周囲に、光球を飛ばした。
「これは――神の遺跡か……？」
天井付近は、滑らかな、ドーム状で、
幾つも、通路があったが、落盤で、塞がれてる。

「シルベルト？、怖い顔して、どうしたニャ」
突然。進み出したシルベルトは、人狼の姿になっていた、
獰猛に、牙を剥いて、威嚇するような唸り声。
「どうしたシルベルト？」
戸惑う二人を、無視して、
様子がおかしい……。
「見るニャ、シルベルトの行こうとしてる。通路だけ、床が一部黄色いニャ」
言われて、気付いた、よく見てるな……。
感心した。
「シルベルト先に行くよ。どうするニャ？」「行こう……、あのまま１人に出来ない」
様子が、変だった。
「はいニャ！」
おかしい……。

シルベルトは、ここを知ってるような…。
疑念が、胸中に広がる。

少し進むと、シルベルトは、人間の姿に戻り。ばつの悪そうな、顔をして、待っていた。二人は、顔を合わせ。ひとしきり笑う。
憮然とした、
シルベルトも薄く唇を歪めた。

シュレットは、光球を減らして、
辺りを照らしながら進んだ。
どうやら古代の遺跡、神の遺跡と呼ばれる。物のようだ、文献には、
近付いたら、自動に開く、鉄のような扉、とあるが、
この遺跡、死んでるのか、近付いてもびくともしない。
並の魔法では、
扉に傷すらつかない。魔法銀（エネミア鉱）で造られたのでは、

魔導師としては、部屋の中が、気になる。
「なんか……、変ニャ……」
「そうだな……」
シルベルトも同意する。
「埃ぽくないな」
最近まで、使われてたような、人の息使いすら、残ってるようだ、
「嫌な……、気配だ」「ああ……」
この気配。覚えがある。
地下迷宮。六魔王の居城に、迷い込んだ気分だ……。
シルベルトは、人狼になっていた、
危機感から――、
変身したのだろう。
「シュレット……、聞いてくれるか」
唐突に、悲痛な、声を出して、助けを求めるように人狼は、呟いた。

――遥か昔。

神世の時代。神は、新たな世界創造の旅に、――出る。まだ幼いこの世界に、幼い『神の子』だけ残すことの。不安から、神は、娘に１２人の『神の代行者』を与えた。

『神の代行者』は、

神人８体、竜神２体、狼神１体、亜人１体

の構成で、

『神の子』が、世界を統べる助けを、するはずであった……。

だが……神人達は、

自分達こそ、真実たる神であると、

『神の子』を、森に捨ててしまった、

他の『神の代行者』は、神人を非難したが、四体の神人以外を、断罪した、

大陸には、人間が生まれ、様々な種族が、誕生していた、

そう……、

『神の代行者』は、新たな種族を、それぞれ作り、国を作っていた、

神人に近い種族人間の国が、森にもあり。

人間の夫婦が、『神の子』を拾って、人間として、育てられた。

「ここは……、その中の神人の１人が使っていた、研究所（ラボ）だ……」

「ラボ……？（『神の代行者』言語か）」

聞き慣れない言葉に、首を傾げた。

「それだけの事を知る。あんたは……いや、ただのシルベルトでい

いさ……」
「変わり者め」
初めて、笑みを見た、
――『契約者』の試練の時。
人狼は、強さと慈愛のある。言葉を、シュレットに掛けてくれた。
「どうしたニャ？」
「なんでもない、早く終わらせて、釣りでもするか！」
「釣りってなんニャ？」
キョトンと、首を傾げた、
二人が、釣りの話をしてるのを、優しく目を細めた、
最後まで『神の子』
の為に生きる『神の代行者』は、人狼として、歩み始めた……。

――肌が、泡立つ。

魔素に似た、ねっとりした、魔力に満ちていた、
最奥らしき部屋、
入り口から、左右に１０本以上の柱が立っていて、
壁は、不可思議な、明滅を繰り返す。何かがある。
「光よ」
新たに、光球を作り、飛ばした。
――ドクン……。
胎動のように、微細な振動。
「今のは……」
――ドクッ、ドクッ……。

まるで、魔女の城のようではないか……、
直感した、この遺跡は、生きている。
寒気すら、生ぬるい、圧倒的な気配が…、

――――いる。
――何か……、いる。
部屋の中央、大きな窪みのある。祭壇が、
幾何学的な、黄色い石を解して、複雑な模様を産み出している。
「多重魔方陣！」
文献だけ残る。遺産。
「この施設はなんだ」
不気味な、吐き気を覚えてる

「新人類、創造装置」「なに？」
祭壇付近の魔方陣は、余りに複雑で、まるで読めない。
シルベルトは、静かな怒りを瞳に宿して、拳を握る。

「なんニャ？、シュレット見るニャ！、柱の中に、何かいるニャ」
キャリンは、柱の中を注視している。
コポリ……。
泡が、上に昇る。
柱と思ったのは、半透明な何か、中は、水のような液体、
……ボコッ…。
！。濁った液体、
人形の化け物が、浮かぶ……。小さく後ずさる。
――ようやく、理解した。これが人間……、
こんな物が、人間だと
「ふざけるな……」
顔が、強ばる。
「これが『神の代行者』の所業だ、

あの者達は、神などではない……」

―――ブッ……、

―ブッブブ……、ブッブブ、ブブブブブ。

耳障りな音、虫が、耳元でまとわり着く、
不愉快な、低周波は、反響して体感した、
「きっ気持ち悪いニャ」
青ざめるキャリンが、耳を押さえる。
「クッ……」
「来るぞ！」

ゾワ……、
寒気に、襲われ。歯を、噛み締める。
『クッククククク、アハハハハは、久しく目覚めれば、下等な人間が、迷い込んでおるわ』

傲慢。人を、人と思わぬ声音。
思念……。
これ程、不愉快な思念を、今まで、感じたことがない、
「グルルルルル…」低い威嚇音を、口内から漏れ出る。
『ほう……。
まだ世界に、人狼が残るか』
せせら笑い、嫌らしいく、不快感な思念が、頭に響く。
『下等生物どおし、仲がよいのお～。
ああ～それとも、
神である我の尊顔を拝するか、下等生物が、這いつくばって、床じゅう舐めて綺麗にせよ。特別に赦すわ、
クッククククク、

ビャァハハハハハは、それはいい」
――狂ってる……。

『おお、そうだ……、新しいモルモットが不足しておる。よいのお〜それはいい…』
「クッ」
思念が消えた瞬間。
足元が、揺れた。立ってられないほど……。
強大な力を持つ何か、足元から、ゆっくり競り上がるような、気配がする。
ギュルギュル金属を、擦る。耳障りな音に、顔をしかめ、人狼は、祭壇を。鋭く睨む。

透明な石……、
祭壇中央が、開き。
穴から……競り出すように、魔法文字が、蟻のように、無数に描かれた、水晶が、現れた。
半ばまで、競り上がると、
「何か入ってるニャ、なんニャ、あれは」
干からびた、木乃伊が、水晶の中に入っていた、

『神の美しさに、言葉がなかろう』
悪夢だ、吐き気さえ覚えた。
「笑わせるな、何が神だ、たかが旧人類の癖に」
高らかに、嘲笑するシルベルトを、ギョッと見た。
『なっ何を言う…』

直接心にリンクする思念は、自身の心。傲慢さにヒビを入れられたのに気付かない。

不安、恐怖の感情が流れてきた。
『わっ矮小な、獣人ゴトキが！』
悲鳴のような思念。吐き気を堪える。
たが……シルベルトは、
怒りの形相で、爆弾を落とす。それは『神の代行者』（かみ）にとって……、
容認出来ない現実となる。
「貴様は、昔から口だけだ、ゼウラー」
ハッと息を飲んだ、
ゼウラー…と言う名は、聞き覚えがある。
創世神ゼウラー……。
三柱の主神、光神パルキ。地神ディース。月神アーネリーの父に当たる。
神として、知られている。
神聖国パルディアは、三柱の主神を教義に掲げる国だ。
シルベルトが獣化（じゅうか）を解いて、人間の姿に戻る。

『なっ……。
あり得ぬ。あり得ぬ。あり得ぬは！』
神と名乗る男の思念が、

――――壊れた。

絶叫するように。神ならぬ男は、悲鳴をがなりたてる。
『なぜだ……。なぜ貴様が生きている。
オーランド！』
狂った思念を、撒き散らした。
ゼウラーの強力な思念により、部屋中の柱にヒビが入り。
白濁した、液体が流れた。
「神なのだろう？、そんなことも分からないのか？、

だから――他の7人に、裏切られた」
純粋過ぎた怒りを、無口な人狼は口にした、
「シルベルトが怖いニャ」
「……確かに」予想外のスケールに……。困惑を隠せない。
ギロリ、シルベルトに睨まれ。たじろいだ。
「うっ」「ニャニャ」
慌てて口をつぐみ。首を竦めた。
「お前達は、壁の装置を壊せ、そいつの生命維持装置だ」
意味は分からないが、逆らってはいけない。二人は、背筋を伸ばし大きく頷いた。

――調子が狂うよ。
ぼやきを口内で呟いた。
『おのれ……。おのれ……。おのれ！』
水晶を中心に、凄まじい魔力が、
祭壇四方に置かれた、クリスタルに流れた、『我こそ神だ！、神だ神だ神だ神だ神だ神なのだ！』
偽りの神、狂った神を名乗る男は、
強大な魔力を放つ。

――我が、使い魔にして、美しき妖鳥姉妹（ハーピィ）よ。
シュレットに、ぴったり寄り添うように、
色彩鳥のような、美しい髪を、金の鎖で、束ねている。
人間の腕に当たる部分は、翼になっていて。美しい姉妹のハーピィが、
羽ばたき一閃。降り立つ。

強力な魔力が、キャリンを中心に放たれ。

無駄に大きな魔方陣を呼び出した。
「さあ～♪。皆くるニャ！？」
呪文すら唱えない。ただ呼んだだけなのに、強すぎる。魔力は、召喚を可能にした、
魔女の城、研究施設で、睨めっこしてる。
あいつ等を呼び出す。ニ体の鉄の魔導兵（アイアンゴーレム）
グリフォンに似せた、石像魔導兵（ストーンゴーレム）
三体ともコミカルな、顔をしていた、
「皆～、やっちゃうニャ♪」
脱力感に見舞われる掛け声だが、
力は本物だ、一発で、液体の入った、柱を粉々に砕いた。

『おのれおのれおのれおのれおのれおのれおのれ！』
狂った叫びが、錯綜した。怒りの凄まじさに、部屋を震わせる。
『許さぬ許さぬ許さぬ許さぬ赦さぬわ……』怨念のような呪詛を唱え。水晶とクリスタルに、魔力が集まり。
『集え我が兵よ。我が敵を滅ぼせ！！！』
波形状に、魔力が放たれ。複数の魔方陣が、一度に開く。
凄まじい数の様々な、魔法生物が、部屋を圧巻させた。
「ニャニャニャ！凄い数ニャ」
圧倒的な数は、シルベルトの胸中を不安にさせた。
「シルベルト！。あの馬鹿は、お前の手で始末つけやがれ！後のザコは、俺達に任せな」
ハッと我に返り。目を開く。
驚いていた……。
震えた……、拳を強く握り、仲間の声に。
ただ頷いた、

グルルルアオオオオオォォ――。
たった1人の『神の子』を守っていた『神の代行者』たる狼神は、仲間の期待に。心を奮わせた。

霞むスピードで走り。迫る魔法生物の隙間を駆ける。
『加速』×『防御』＋『敏捷』
多重強化の魔法を、一瞬で自身に掛ける。

『おろかな…。愚かな。愚かな！。真なる神の前に、死すがよいわ！』
迫る人狼に向け、魔方陣が開く。

「シュレット様上です」重々しい羽音を耳にして、光球を増やして、放つ。
「ガーゴイルか、チッ…」
舌打ちして、素早くプランを変えた。
「リオナは俺の背に『風壁』を張れ、ナッシュは『風刃』で迎撃。デカイの放つ」
『はい』
姉妹の顔は、嬉しそうに、シュレットに寄り添う。
二人が、体制を整える間、『風弾』（エアーアッパー』を複数放つ。
「シュレット様」
姉ナッシュの声を聞き、
強大な魔力の封印を解いた、
ピィーヤ。歌声で、ハーピィは魔法を放つ。次々『風刃』（エアーカッター）で、ガーゴイルを足止めした、数が数で、合間合間に、防壁にたどり着き、
槍で突撃してくる。

――我が、真名（まな）に答えよ――。

これから喚ぶのは、六魔王の1人、
己の身体を剣に封じた、
『魔神剣』（まじんけん）
――魔神アビル。

――闇世に浮かびし月光、汝の姿を浮かばさん。

闇が現れた――。

闇に、手を入れて、黒い刀身の片刃の大剣を――構え、
風の結界から、飛び出して、
ガーゴイルに一閃。
二閃させる。

見える範囲のガーゴイルは、砂塵と化した。
「チッ、さすがに数が多いか…」
それでも牽制になり、ガーゴイルは警戒して、遠巻きに滑空する。
―だが、距離は関係ない。

獰猛に笑う、人間の心にある闇――。
毒が、胸中に広がる。闇に『魔神剣』を投げ落とした瞬間、音もなく送還され消えた…。

――我が声に答えよ。『腐敗の魔王』（ゾアルイータ）よ

魔力は、腐り始め。魔気となり。
死者の吐く。腐臭のように――広がる。

ポチャン……。

床が、黒い腐液と変わり。
波紋が――広がる。
……ゆるり。
ドロリとした腐汁から、皮膚のない顔を瞼のない目を歓喜に歪め。
両手を捧げる。
禍々しい。腐臭を放つ、一本の杖を差し出した。
「グッ……」
掴んだ瞬間、腕に凄まじい激痛が襲う。

まるで……少しずつ腐りゆくようだ……、
意志の力だけで、
杖を引き抜いた、
『腐敗の魔王』ごと……。

いつの間にか手にした杖は、シュレットの身長より大きく。
冥界のルーンを唱え、魔力を魔素に返還させて、放つ。

ギィィィヤァァアアアアアアーーー

杖は、断末魔の如く。共鳴した。
ありとあらゆる物質を崩壊させる。
禁断のビートを奏でる。
――異界の魔王たる。『腐敗の魔王』の力を、呼び覚ます。儀式

「『腐喰』（ドレイン）」

不吉な呪詛から、杖は数多の腐敗を、放射した。
それは……一瞬――。

天井を埋め尽くした、ガーゴイルは、砂塵すら残さず。消え失せた、
「ガッハ……」
強すぎる。魔素に、吐血した、
「シュレット様！」
生を喰らう、『腐敗の魔王』に根こそぎ魔力を喰われたのだ、

「近づくな！」
二人のハーピィは、凍り付いた、
一つ頷いて、杖を腐汁に投げ込む
『我が君。またいつでもお呼びを……』
皮膚のない唇、剥き出しの歯をこの上無く。笑みにして、
『腐敗の魔王』は、
一礼しながら……、
沈み込んで行く。

なんとか――送還出来て。安堵のあまり。喘ぐ、
「すまない…、大丈夫だ…」
ハーピィ姉妹に抱き抱えられ、脱力した、

「今ニャ～♪、増えるニャ、皆～突撃ニャ！」
いつの間にか、アイアンゴーレムは十体に、ストーンゴーレムも三体と、増えていた、
ストーンゴーレムは、キャリンを守るように、動く鎧（リビングアーマー）の猛攻を防ぐ。
キャリンの周りに、動く鎧の残骸が、散乱していた、キャリンは残骸に、手をふり。
「増えるニャ♪」残骸は、一つに集まり、アイアンゴーレムを造り出した。
無駄に大きな魔方陣が、キャリンの魔力を、ゴーレム製造に、変換

する。
これが半年の間、造り上げたキャリンオリジナル魔法である。

ゼウラーは、
四方のクリスタルに、魔法生物を融合させて、使役した。
４つの融合生物は、甲羅の中にクリスタルを隠して、
人狼を遮り、それぞれ攻撃してきた、
「グルルルル…（チッ４大元素地水火風の力で、触手がコーティングされてる）」
緑色の融合生物の触手は、毒と麻痺。
叩かれた腕が痺れた。
「アオオオォォォー」『戦の叫び』（ウオークライ）で、
瞬発力を上げる。

大きく後ろに飛び退き、鋭い爪を低く構え。加速をつけ。走り出した。

赤い触手の融合生物が、触手に火を纏い。
編み目のように広げ、押し包みに掛かる。

ヒュオオォォー、

左右に飛びながら、
爪を伸ばして、凄まじいスピードで、
触手の網を切り払う、だが、身体に触れた触手が毛皮を焼いた、

「『空牙狼三弾』（くうがろうさんだん）」渾身の一撃を、融合生物の甲羅に、叩きつける。

凄まじい――スピード×瞬発力で、放てられた拳撃は……、
赤い融合生物だけでなく、群れで襲いかかる狼のように。
青い融合生物、黄色融合生物のクリスタルに、喰らい尽く。
『なっ……バカな……』
突然の出来事に、呆然とした思念が流れた、
アオオオォォォー
多重魔法を自分に掛けて、止まらず。
伸びる。緑の触手を、爪で切り裂き、
甲羅の一点を、ラッシュで攻撃した、

「ウォォォオオオ―」
魂の叫びで、ついに甲羅にヒビが入った。
紙一重で、触手をかわして、
近距離から、融合生物の下から、
上体を、沈み込ませるように、渾身の一撃を放つ、

ビクビク、融合生物が、大きく震え、手が、クリスタルを掴んだ。
「フン！？」
腕が一回り太くなり、クリスタルを砕いた。
砂の塊が、崩れるようにザザーっと、融合生物が崩れ去る。
『あり得ぬ……。有り得ぬ……』
「終わりだゼウラー」
静かな呟きは……、
喧騒の消えた室内に響いた。
『ヒッヒー……。まっ待て、オーランド、やっ止めろ！？』
傲慢な思念が、恐怖に震え、生にしがみつく姿は、
醜く――吐き気を抱く。『頼む……頼む！。頼むオーランド！』
狂喜の仮面すら剥がされ。偽りの神は、

恐怖に震えた。
『いやだ……死にたくない、俺は悪くない！そうだ俺は悪くない、全て、あの三人が悪いのだ、なっなっ、何でも喋る。命だけは――』
バキン、
『あっ……』
シルベルトの拳が、水晶にめり込み。
封じられた時間が、木乃伊を、砂に変えた。
ただそれだけだ――。

エピローグ

三人が、地上に戻ると沈む夕日を見ながら、砂浜に、倒れ込む。
魔力を使い果たした三人は、
魔力回復まで、空を見ていた、
「シュレット……」
「ん？」
傍らで、寝息を立てるキャリンに、外套を掛けてやる。
「聞かないのか？」
実直な光を、瞳に宿す人狼に、素知らぬ顔で、
「興味はないね。お前が誰だろうが、今はシルベルトだろ、それで十分だ」
重い檻を、外すような言葉に人狼は、嬉しそうに、そうかと呟き、
静かに眼を閉じる。
波音が、ただ三人を包んだ。

――終―

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3459t/

呪いの森と、魔女の国

2011年5月17日20時24分発行